Bulletin of Aichi Univ. of Education, 73（Educational Sciences）, pp. 20 − 28, March, 2024

幼児間で用いられる強い身体接触の役割と発達的傾向

渡邉 拓真 *　鈴木 裕子 **

* 広島大学附属幼稚園　大学院修了生

** 幼児教育講座

Roles and Developmental Trends of Strong and Close Body Contacts among Young Children

Takuma WATANABE* and Yuko SUZUKI**

*Kindergarten Affiliated to Hiroshima University, Graduate, Aichi University of Education

**Department of Early Childhood Education, Aichi University of Education, Kariya448-8542, Japan

Abstract

Young Children interactions include “strong and close body contacts” with another person, such as hitting, pulling, and pushing. This study examined the extent to which the three characteristics—aggression, playfulness, and intentionality—were associated with the “meaning of strong and close body contacts” and whether they changed over time. On this basis, it aimed to show the roles and developmental trends of strong and close body contacts. The kindergarten three-year duration was divided into nine periods, and a four-quadrant matrix scatter plot was created for each period for analysis. The results suggested that the first to second period of three-year-olds was an “alternative period for words that cannot be expressed,” in which strong and close body contacts s were accompanied by a high level of aggression. The third period of three-year-olds to the first period of five-year-olds was a “period of self-expression with playfulness,” such as playing in jest. The second to third period of five-year-olds was a “period of mutual negotiation with intentionality and playfulness,” in which strong and close body contacts s were made with a combination of the three characteristics to interact with others.

Ⅰ　問題と目的

1　問題の所在

幼児間のかかわりには，言葉だけでなく身体を接触させる場面が見られる。それは友達と手をつないだり相手を抱きしめたりするような好意的なものに限らず，相手を叩く，引っ張る，押すなどの行為をもって，他者に対して身体を強く接触させるような，一見攻撃的に捉えられる「強い身体接触」行為もある。

幼児が身体を用いて他者と接触することでもたらされる価値は，これまでに様々な研究[1) 2) 3) 4) 5)]によって見出され，幼児が他者との関係を構築したり展開したりすることが示されている。一方で幼児が他者を強く叩く，押すなどの行為は，身体接触のネガティブな一側面としてしか見なされず，研究の俎上に載ることはなかった。しかし，幼児間で用いられる強い身体接触は，必ずしも危険を危惧するのみの行為とは限らず，叩いた後も相手とのかかわりが継続するなど，他者とかかわるための一方略として用いられていると捉えられる場面があり，他者とのかかわりにおいて何らかの役割をもつと考えられた。

2　研究の経緯

渡邉・鈴木[6)]は，強い身体接触を「他児に対して身体接触そのものを用いてかかわろうとする意識がみられる相互行為であり，その中でも，力量が強く表れている行為」と定義し，幼児間で用いられた強い身体接触の事例から，他者とのかかわりにおける強い身体接触のもつ意味を検討した。その結果，幼児間で用いられる強い身体接触の発現頻度と，強い身体接触がもつ意味の分類が示された。以下に研究の概要を記す。

2.1　強い身体接触の発現頻度

2.1.1　観察対象と期間

愛知県内私立Ａ幼稚園に在籍する幼児96名を観察

の対象（3歳児31名，4歳児31名，5歳児34名）とし，2019年6月から2020年2月の期間に，自由活動中の幼児の姿を定点ビデオカメラで撮影した。撮影は各年齢29日間行い，総撮影時間は2625分であった。その後，独自に作成した分析シート[注1)]をもとに逐語化し事例とした。

2.1.2　年齢別にみた強い身体接触の発現頻度

観察期間のうち「強い身体接触」と捉えられた事例は，3歳児49事例，4歳児82事例，5歳児90事例の全211事例であり，接触数では3歳児57回，4歳児93回，5歳児102回の全252回であった。強い身体接触の発現頻度について，3歳児，4歳児，5歳児の年齢別にχ^2検定を行った結果，年齢に有意差が認められた（$\chi^2_{(2)}=13.5, p<.05$）。その後に行った残差分析の結果，3歳児で発現した強い身体接触は有意に少なく，5歳児は有意に多く発現したことが明らかとなり，年齢による差が認められた。

2.1.3　幼児間における強い身体接触がもつ意味の分類

抽出された事例をもとに，強い身体接触を用いる行為者が，どのような意味でその行為に及んだのかという観点から分析シートを用いて考察した結果，幼児間における強い身体接触がもつ意味が8つに分類命名された（表1）。

分類された強い身体接触を用いる意味(8)×年齢(3)についてχ^2検定を行った結果，有意差が認められた（$\chi^2_{(14)}=37.90$，$p<.01$）。その後の残差分析の結果，【ⅰ言葉にならない・言葉では表現しきれない思いが溢れる】意味で用いられた強い身体接触は有意に3歳児に多く【ⅰ言葉にならない・言葉では表現しきれない思いが溢れる】意味で用いられた強い身体接触は5歳児に少ないことが示された。また3歳児では【ⅶ同調してノリを合わせる】意味で用いられた強い身体接触が4･5歳児より有意に少なく，5歳児では【ⅳ 言葉では表現しきれない考えを補う】意味で用いられた強い身体接触が3･4歳児より有意に多いことが示された。この結果から，強い身体接触がもつ役割が以下のように示された。

3歳児に多くみられた【ⅰ言葉にならない・言葉では表現しきれない思いが溢れる】意味をもつ強い身体接触は，相手の言動によって感情が高揚し，その感情がそのまま強い身体接触として発現していたことから，「言葉の代替」としての役割が捉えられた。

また【ⅶ 同調してノリを合わせる】【ⅴ反応を期待して仕掛ける】【ⅵ 行為自体を楽しむ】などの相手とかかわろうとして用いられる行為には，ふざけやおどけなどの遊戯性を伴わせることで自己を表現しようとする事例が多く抽出されていたことから，強い身体接触は「自分を表現する」役割をもつことが示された。

5歳児では【ⅳ 言葉では表現しきれない考えを補う】意味をもつ強い身体接触のように，感情を調整して思考的に強い身体接触を用いることで他者に対して自分の考えを伝えようとしている姿が捉えられた。強い身体接触に遊戯性を伴わせながら自分の考えを受け手に理解してもらおうと意図的に用いるなど，「相手と交渉する手段」としての役割をもつと考えられた。

以上のように，強い身体接触は幼児の発達によって，役割が変容することが示された。

2.1.4　強い身体接触がもつ意味から導きだされた3つの性質

強い身体接触のもつ意味は8つに分類されたが，分析を進める中で強い身体接触の発現に伴う3つの性質が捉えられた。

1つ目は「攻撃性」である。幼児が【ⅰ言葉にならない・言葉では表現しきれない思いが溢れる】【ⅱ発

表１　強い身体接接触のもつ意味の分類と年齢別にみた発現数

分類名	強い身体接触がもつ意味	強い身体接触の発現回数 3歳児	4歳児	5歳児	計
ⅰ 言葉にならない・言葉では表現しきれない思いが溢れる	思い通りにならない場面や，不快感を覚えるなどして感情が急激に高揚し，相手のことを考慮したり，伝達の方略を選択したりするのではなく，感情と連動して思いが溢れるように突発的に発現する	17	7	6	30
ⅱ 発した言葉を強調する	言葉を使って自分の思いや考えを伝えようとする際，その思いを確実に相手に伝えるために，自分の発した言葉を強調する	5	4	4	13
ⅲ 自分の思いを一方的に発散する	親密性を感じている相手に対して相手の反応を期待することなく，一方的に身体を用いてかかわることで，自分の気分を落ち着かせる，触れることで身体の感覚を得る，一定の満足を得る，などのために自分の思いを発散する	2	1	3	6
ⅳ 言葉では表現しきれない考えを補う	感情のままに行為に及ぶのではなく，相手との関係性を含めて，自分の目的を達成するために十分に考慮し，身体を用いることでその考えを補う	0	0	5	5
ⅴ 反応を期待して仕掛ける	遊戯性を伴わせて身体を強く用いることで，相手の反応を期待し，かかわりのきっかけとしようとしたり，かかわりを展開したりするために仕掛ける	16	27	33	76
ⅵ 行為自体を楽しむ	相手と押し合うことで自分の力を発揮することを楽しむなど，身体を強く接触させること自体を楽しむ	8	23	17	48
ⅶ 同調してノリを合わせる	他児同士のかかわりに参加したり，相手とかかわったりする際に，その場面にある状況や雰囲気を理解し，強い身体接触を用いることで，その場の雰囲気と同調しながらノリを合わせる	7	24	27	58
ⅷ 共有している世界観を発展させる	幼児間のかかわりにおいて作り出された雰囲気や状況設定を，強い身体接触を用いることによって色濃く共有し，遊びの一体感を生み世界観を発展させる	2	7	7	16
計（回）		57	93	102	252

した言葉を強調する】意味をもつ強い身体接触を用いるとき，相手から受けた行為によって感情が湧き上がり，突発的に行為が発現していた。その際には，相手に構わず自分本位にかかわる姿が見られ，そのような行為は“攻撃的な行為”として読み取ることができ，強い身体接触には攻撃性が伴うことが示された。

2つ目の性質は「遊戯性」である。【ⅴ反応を期待して仕掛ける】や【ⅵ 同調してノリを合わせる】意味をもつ強い身体接触の事例には，相手に対してふざけながら自分の額を受け手の額に強く押し付け笑顔を見せる行為や，受け手を叩く際に笑顔で「とあっ」と掛け声をかける行為が捉えられた。これらの事例のように強い身体接触に遊戯性が伴うことによって，押す，叩くといった一見攻撃的な行為であっても，受け手が受容する原因となり，かかわりのきっかけや展開の要因になると考えられた。

3つ目の性質として「意図性」があげられた。【ⅰ言葉にならない・言葉では表現しきれない思いが溢れる】意味をもつ強い身体接触の事例では，幼児が壁面構成を鑑賞中に他児が接触してきたことで，自分の場所を守ろうとして感情的に相手を押す行為が捉えられた。これは“自分の場所を守る”ために衝動的に用いられており，意図的な行為ではなかった。一方で【ⅳ言葉では表現しきれない考えを補う】意味をもつ強い身体接触の事例では，相手に対して場所を移動してほしいという思いを感情的に伝えたものではなく，どのようにしたら相手との関係をむやみに壊すことなく自分の場所を取り戻すことができるかを考えながら意図的に行為に及ぶ姿として捉えられた。この行為は感情に囚われて行為に及んだものではなく，相手との関係性を考慮しながら，自分が求める場所を得ようとする意図性を伴う行為であった。

この3つの性質は，強い身体接触のもつ意味や役割と同様に，発達による変容が捉えられる可能性があると考えられた。

3　本研究の目的

これまでの研究結果[7]をもとに本研究では，「攻撃性」を「相手の行動に対して衝動的に遮断させたり変容させたりするもの」，「遊戯性」を「相手とのかかわりを生起させたり展開させたりするために用いるふざけやちょっかい」，「意図性」を「行為の先の見通しや期待をもって相手にかかわろうとするもの」として操作的に定義し，この3つの性質が強い身体接触にどの程度伴われ，時期によってどう変容するのか検討する。

また発達的な傾向を詳細に捉えるため，観察期間の区分は学年単位ではなく，時期で分けることとする。観察対象とした園の保育計画と子どもの発達段階を踏まえ，6月から夏季休暇前までの7月を第1期（観察日数：各年齢8日間，観察時間：815分），9月から12月の生活発表会前までを第2期（観察日数：各年齢12日間，観察時間：1000分），12月の生活発表会後から2月までを第3期（観察日数:各年齢9日間，観察時間:810分）として，一年間を3期に区分する。

強い身体接触に伴う3つの性質と，意味の8つの分類の双方を絡み合わせて時期的な変容過程を捉え，強い身体接触の発達的な傾向を示すことを目的とする。

Ⅱ　研究方法

1　観察対象と期間

愛知県内私立Ａ幼稚園に在籍する幼児96名を観察の対象（3歳児31名，4歳児31名，5歳児34名）とし，2019年6月から2020年2月の期間に，自由活動中の幼児の姿を定点ビデオカメラで撮影した。撮影は各年齢29日間行い，総撮影時間は2625分であった。

2　分析手続き

4象限マトリクス散布図（以下，散布図）を作成して分析を行う。散布図を用いることにより，収集された252回の強い身体接触に対して「攻撃性」「遊戯性」「意図性」の3つの性質がどの程度伴われるのか，時期毎に作成した散布図を比較し視覚的に判断することで，発達的な傾向を読み取ることが可能になると考えた。

3　倫理的配慮

園責任者に研究の趣旨を伝え，撮影と観察への了承を得た。また個人情報保護のため対象児を匿名化した。

Ⅲ　結果と考察

1　強い身体接触のもつ意味に伴う３つの性質による発達的傾向

1.1　４象限マトリクスによる散布図の作成と時期の区分

強い身体接触のもつ意味として8つに分類された全252回の強い身体接触のひとつひとつに対して，3つの性質がどの程度伴われているのか，事例と分析シートから解釈した。

その結果を用いて「攻撃性×遊戯性」「遊戯性×意図性」「意図性×攻撃性」の観点から，それぞれの性質が8つの意味に分類された強い身体接触にどのように伴われていたのかを検討した。観察期間の全9期（各学年1期6月－7月，2期 9月－12月前半，3期 12月後半－2月）において，図1の散布図を作成し，9期の類似性や相違性について比較検討を試みた（散布図内の英数字は事例番号を指す）。

まず，3歳児における攻撃性×遊戯性の散布図（図1）から，期によって強い身体接触の分布の仕方に違いがあることが示された。散布図左上の攻撃性が高く遊戯

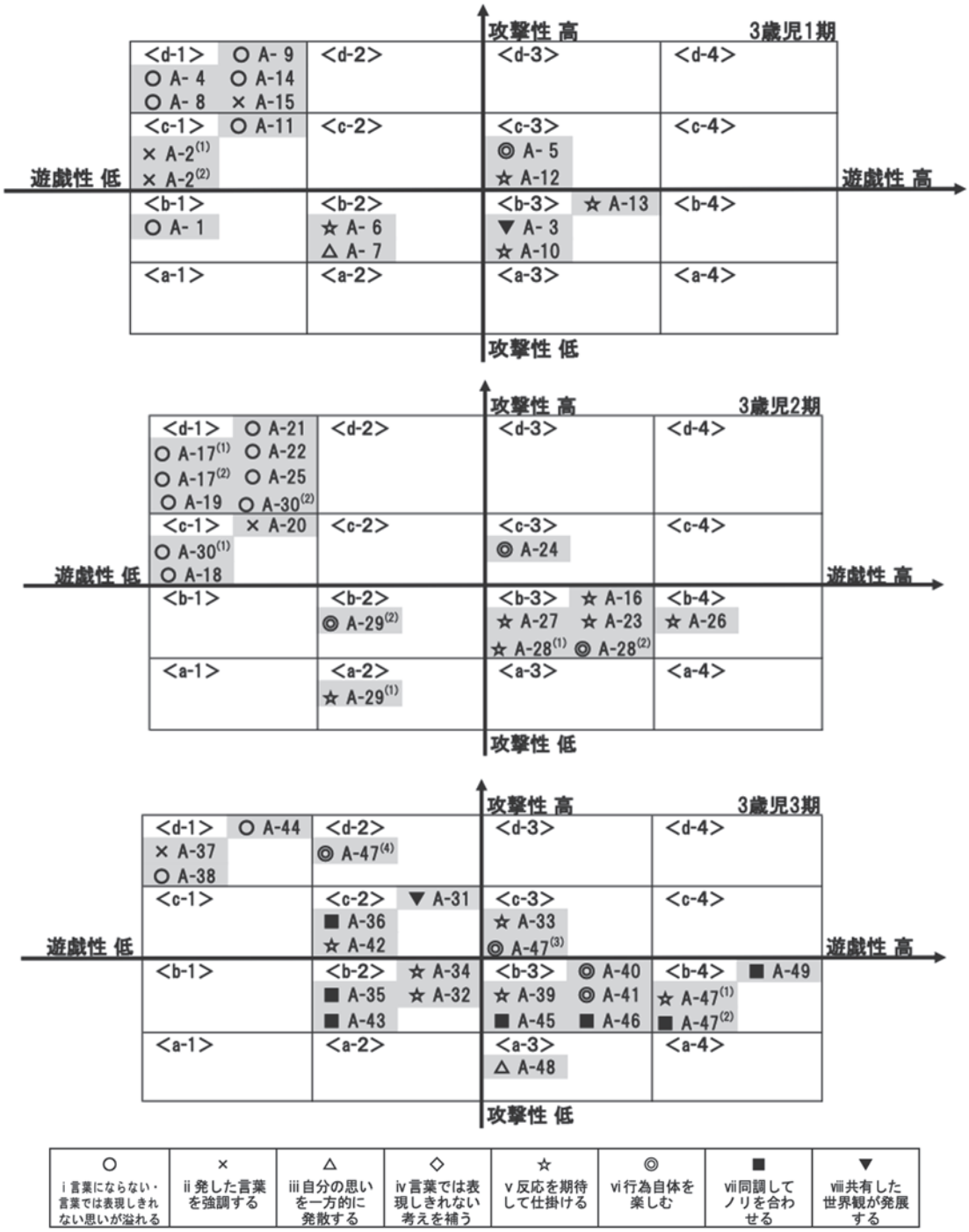

図１　攻撃性×遊戯性の観点からみた強い身体接触のもつ意味の散布図（３歳児）

性が低いエリア（図1内＜ｃ－1＞＜ｃ－2＞＜ｄ－1＞＜ｄ－2＞）に位置する強い身体接触において【ⅰ言葉にならない・言葉では表現しきれない思いが溢れる】と【ⅱ発した言葉を強調する】意味をもつ強い身体接触が，3歳児1期，2期では多数発現しているが，3期には発現数が減少していることがわかった。次に散布図上部の攻撃性が高いエリア（図1内ｃ行とｄ行）に位置する強い身体接触の割合を比較すると，3歳児1期は16接触中10接触の62.5％，3歳児2期は19接触中11接触の57.9％，3歳児3期は22接触中9接触の40.9％であり，3歳児3期のみ高い攻撃性を伴う強い身体接触の割合が半数を下回ることがわかった。同様に4歳児と5歳児の散布図では，散布図上部に位置する攻撃性が高い強い身体接触の割合が，半数を超える期はみられなかった（紙幅の都合上，4歳児と5歳児の散布図は未掲載）。全9期の攻撃性×遊戯性の散布図のうち，3歳児1期，3歳児2期のみ，高い攻撃性を伴う強い身体接触が半数を超えることがわかった3期以降に発現するようになる【ⅶ 同調してノリを合わせる】意味をもつ強い身体接触が抽出されていないことがあげられる。この意味をもつ強い身体接触は，相手と場面の雰囲気を理解して同調しながらノリを合わ

せる行為であるため，3歳児1期と3歳児2期にはみられず，発達に伴い発現するものと考えられる。そのため，3歳児1期と3歳児2期を一つのまとまりとし，3歳児3期と区別して捉えることが妥当であると考えられた。

また，図1の遊戯性を伴う強い身体接触の分布に着目すると，高い遊戯性を伴う強い身体接触の発現頻度が期によって異なった。まず3歳児において，散布図右側の遊戯性が高いエリア（図1内3列と4列）に分布する強い身体接触の割合を比較すると，3歳児1期は16接触中5接触の31.3％，3歳児2期は19接触中7接触の36.8％，3歳児3期は22接触中11接触の50.0％と，3歳児3期のみ半数が高い遊戯性を伴っていた。次に4歳児と5歳児においても，遊戯性の観点から強い身体接触の発現頻度を比較した。4歳児1期から5歳児3期までの遊戯性は，どの期においても遊戯性が低いエリアに分布する割合よりも，遊戯性が高い散布図のエリアに分布する割合の方が多く，その割合は6割を超えた。特に4歳児1期は28接触中25接触の89.3％，3期は38接触中32接触の84.2％と多くの強い身体接触に高い遊戯性が伴われていた。また【iv 言葉では表現できない考えを補う】意味をもつ強い身体接触の発現は，3歳児1期から5歳児1期までは発現せず，5歳児2期以降に確認された。

これらを総合して，攻撃性，遊戯性，意図性の3つの性質を観点として検討する際に，＜3歳児1・2期＞＜3歳児3期・4歳児全期・5歳児1期＞＜5歳児2・3期＞の3つの時期に区分して新たに散布図を作成し，比較検討することで発達的な傾向を示すこととした。

1.2　攻撃性×遊戯性の観点から捉えた強い身体接触

＜3歳児1・2期＞＜3歳児3期・4歳児全期・5歳児1期＞＜5歳児2・3期＞の3つの時期に区分した散布図を用いて攻撃性と遊戯性の観点から強い身体接触を捉える。各時期の散布図（図2）を比較すると，どの時期においても【ⅰ言葉にならない・言葉では表現しきれない思いが溢れる】と【ⅱ発した言葉を強調する】意味をもつ強い身体接触が散布図内左上の攻撃性が高く，遊戯性が低い位置（図2内＜ｃ－1＞＜ｃ－2＞＜ｄ－1＞＜ｄ－2＞）に分布していた。しかし【ⅰ言葉にならない・言葉では表現しきれない思いが溢れる】と【ⅱ発した言葉を強調する】意味をもつ強い身体接触の発現頻度を3期で比較すると，＜3歳児1・2期＞は35接触中19接触の54.3％，＜3歳児3期・4歳児全期・5歳児1期＞は148接触中17接触の11.5％，＜5歳児2・3期＞は69接触中7接触の10.1％であり，＜3歳児1・2期＞に発現した強い身体接触の半数をこの二つの意味が占めていた。＜3歳児1・2期＞には高い攻撃性を伴う【ⅰ言葉にならない・言葉では表現しきれない思いが溢れる】と【ⅱ発した言葉を強調する】意味をもつ強い身体接触が，特徴的に発現している。

また攻撃性が高く遊戯性が低い位置（図2内1列と2列）に分布する強い身体接触を比較すると，＜3歳児1・2期＞では35接触中18接触の51.4％，＜3歳児3期・4歳児全期・5歳児1期＞では148接触中26接触の17.6％，＜5歳児2・3期＞では69接触中11接触の15.9％であった。そのため＜3歳児1・2期＞には【ⅰ言葉にならない・言葉では表現しきれない思いが溢れる】と【ⅱ発した言葉を強調する】意味をもつ強い身体接触に限らず，攻撃性が高く遊戯性が低い強い身体接触が多く発現しているといえる。

また遊戯性の高い位置（図2内ｃ列及びｄ列）に分布する強い身体接触の割合を比較すると，＜3歳児1・2期＞は35接触中12接触の34.3％，＜3歳児3期・4歳児全期・5歳児1期＞は148接触中107接触の72.3％，＜5歳児2・3期＞は69接触中49接触の71.0％であり，＜3歳児3期・4歳児全期・5歳児1期＞と＜5歳児2・3期＞にみられる強い身体接触の7割程度に高い遊戯性が伴われていることに対して，＜3歳児1・2期＞では強い身体接触のうち3割程度となっている。このことからも＜3歳児1・2期＞で発現する強い身体接触には，高い攻撃性が伴われていることがわかる。

【ⅰ言葉にならない・言葉では表現しきれない思いが溢れる】意味をもつ強い身体接触は，思い通りにならない場面や，不快感を覚えるなどして感情が急激に高揚し，その感情と連動するように突発的に身体が動いて行為に及ぶものである。そのため衝動的に発現する行為には，高い攻撃性が伴われる。同様に【ⅱ発した言葉を強調する】意味をもつ強い身体接触も，言葉を使って思いや考えを伝える際に，その言葉を強調することで直ちに，また確実に受け手に伝えるために用いるものであるため，衝動的なものが多い。

以上より，＜3歳児1・2期＞に発現する強い身体接触の傾向として，相手の行動に対して衝動的に遮断させたり変容させたりする「攻撃性」が伴われている。

1.3　攻撃性×意図性の観点からみた強い身体接触

前節と同様に，全期間を＜3歳児1・2期＞＜3歳児3期・4歳児全期・5歳児1期＞＜5歳児2・3期＞の3つの時期に区分し，攻撃性と意図性の観点から散布図を用いて強い身体接触を検討した（散布図未掲載）。

意図性の高い位置に分布する強い身体接触の割合を比較すると，＜3歳児1・2期＞は35接触中2接触の5.7％，＜3歳児3期・4歳児全期・5歳児1期＞は148接触中44接触の29.7％，＜5歳児2・3期＞は69接触中49接触の71.0％であり，＜5歳児2・3期＞には意図性を伴う強い身体接触が多く発現していることが示された。

また攻撃性と意図性のどちらも高い位置に分布する強い身体接触の割合は，＜3歳児1・2期＞は0接触，＜3歳児3期・4歳児全期・5歳児1期＞は148接触中8接触の5.4％，＜5歳児2・3期＞は69接触中8接触の11.6％であった。発現する割合は少数ではあるが，時期を経るとともに，高い攻撃性と意図性を併せもつ強

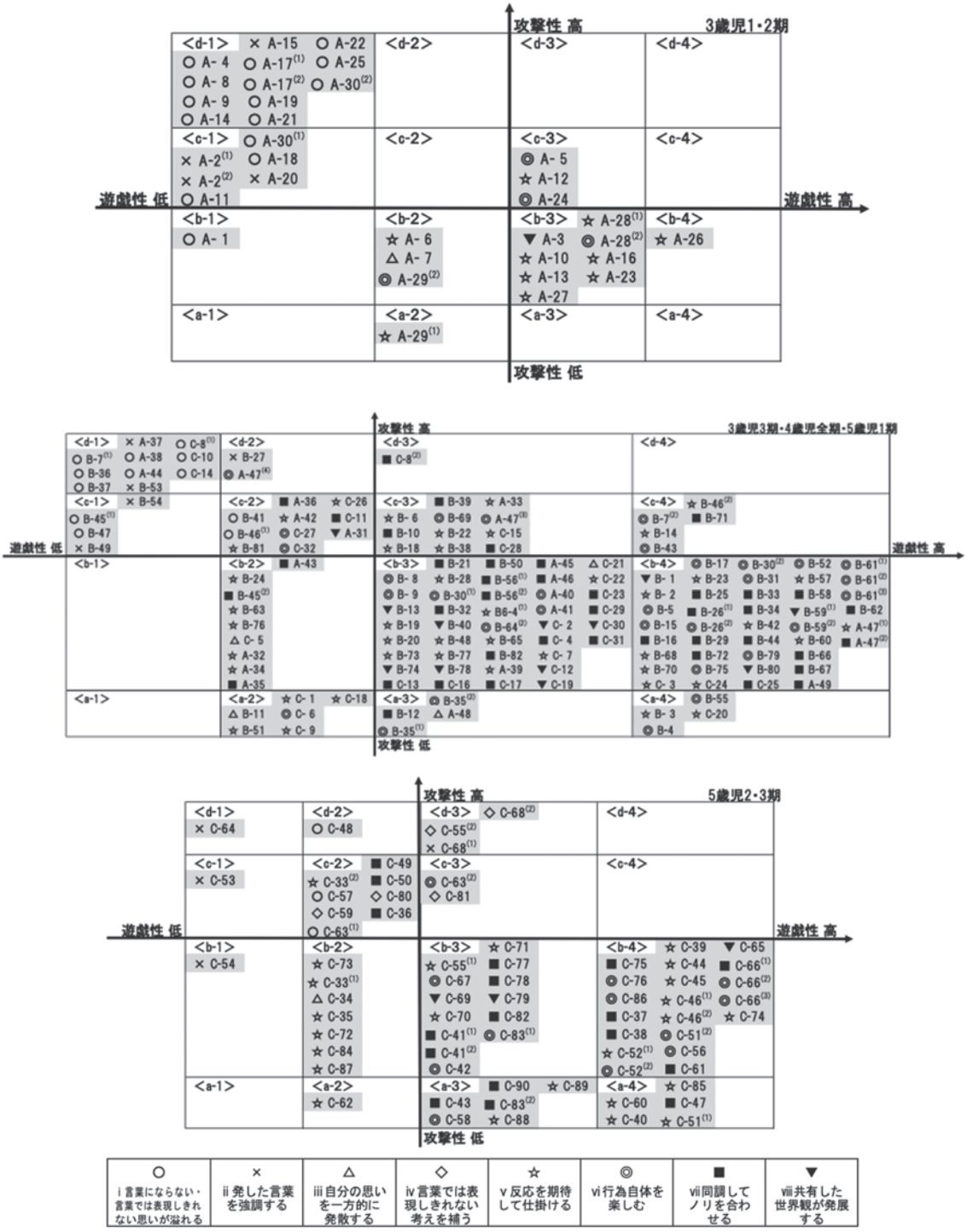

図２　攻撃性×遊戯性の観点からみた強い身体接触のもつ意味の散布図

い身体接触が用いられるようになるといえる。

この理由について，事例を用いて検討する。事例C－68「バブー」は，散布図内では高い攻撃性と意図性を併せもつエリアに位置するものである。

事例C－68「バブー」5歳児　2020年1月23日

CY男は大型積み木を組み立てながら，CD子，CY子とともにままごとをする。CD子がCY男に「ご飯食べる？」と聞くと，CY男は差し出されたおもちゃを受け取り食べる真似をし，積み木から離れて別の場所へ行く。積み木の近くでブロックを組み立てていたCI男は，CY男が不在の間にCY男が組み立てた積み木の上に座り，ブロックで遊びだす。戻ってきた①CY男はCI男に気付くと，真顔で背後から近づき「あっち行け，バブー」と言いながらCI男の背中を握りこぶしで軽く数回叩く。CI男はCY男の行為に気付いて振り向くが，その場を動こうとしない。

すると②CY男は「バブー」と何度も言いながら身

体ごとCI男の背中を強く押し，積み木から降ろそうとする。CI男は「痛い」と言いながら笑って押し返すが，CY男に押し出される。

それでもCI男はCY男に対して，にやっと笑みを浮かべながら再び積み木の上に座る。CY男が再びCI男に近づこうとした時，CL子が「ここにパイナップルあるよ」と言ってCY男に話しかける。CY男はCL子と会話を始めたことで，CI男への対応をやめる。

下線部①の強い身体接触は，CY男が不在の間にCI男が積み木に座っていた状況に対して，自分の場所を取り戻そうとして用いたものである。CY男は，自分が使用していた積み木にCI男が座っていたことに気付くと，真顔で背後から近づいて握りこぶしで数回叩いている。「あっち行け」という言葉を用いて，自分の思いを伝えているにもかかわらず，同時に叩くことによって自分の発した言葉を強調していることから，積み木に座るCI男に対して，自分の場所を取り戻すために衝動的に強い身体接触（【ⅱ発した言葉を強調する】意味をもつ）が発現していると捉えられる。そのため，下線部①の強い身体接触には攻撃性が伴われていると解釈できる。また下線部②の強い身体接触では，下線部①の強い身体接触を用いたにもかかわらず積み木から動こうとしないCI男に対して，CY男がさらに強い力で押している。その際，動こうとしないCI男に対して場所を移動させようとして，言葉ではなく力に頼っており，衝動的に行為に及んだと捉えられる。

しかし，下線部①，下線部②のどちらの行為とも，衝動的に相手の行為を変容させるためだけに用いられたものではなく，相手との関係性を考慮して，用いられた強い身体接触であると解釈できる。分析シートによると，下線部①の強い身体接触では，接触の強さが加減されており（【接触の強さ1】），感情を抑制していることがうかがえる。受け手であるCI男に，必要以上の不快感を与えないようCY男が配慮しているものと考えられる。また，下線部①，下線部②の行為のどちらにも「バブー」という言葉が用いられているが，この言葉によって遊戯性を伴わせることによっても，叩いたり押したりすることによって受け手に与える不快感を軽減させていると考えられる。これらの行為は，無闇にCI男との関係を壊すことなく，自分の場所を取り戻そうとするCY男の意図的な行為として解釈でき，この行為の先の見通しや期待をもってCI男に対して強い身体接触を用いていると捉えられる。物の取り合い場面における幼児の自己調整機能の発達を調査した長濱・高井[8]は，5歳児では自分と他者が交代でものを使う方略を提案する傾向が見出され，就学前期に自己と他者との間を調整する機能が発達する過程が示されたと述べる。

強い身体接触が攻撃性と意図性を併せもつためには，自分の感情を抑制したり，先を見通して思考したりして調整することが必要であるため，＜3歳児1・2期＞には抽出されず，＜5歳児2・3期＞において最も発現頻度が高く現れたと考えられる。

1.4　意図性×遊戯性の観点からみた強い身体接触

＜3歳児1・2期＞＜3歳児3期・4歳児全期・5歳児1期＞＜5歳児2・3期＞の3つの時期に区分し，意図性と遊戯性の観点から散布図を用いて強い身体接触を検討した（散布図未掲載）。

まず遊戯性の高い位置に分布する強い身体接触の割合を比較すると，＜3歳児1・2期＞は35接触中12接触の34.3％，＜3歳児3期・4歳児全期・5歳児1期＞は148接触中107接触の72.3％，＜5歳児2・3期＞は69接触中49接触の71.0％であり，3歳児3期以降に高い遊戯性を伴うことが示されていた。次に意図性と遊戯性を併せ持つ強い身体接触を比較したところ，＜3歳児1･2期＞は35接触中2接触の5.7％，＜3歳児3期･4歳児全期・5歳児1期＞は148接触中35接触の23.6％，＜5歳児2・3期＞は69接触中37接触の53.6％であり，＜5歳児2・3期＞に発現した強い身体接触には，半数程度に高い意図性と遊戯性を伴われていることがわかった。事例C－51「飛びつくように抱きつく」では，行為者が用いた強い身体接触に高い意図性と遊戯性が伴われている様子が捉えられる。

事例C－51「飛びつくように抱きつく」

5歳児　2019年10月4日

子どもたちがそれぞれに好きな遊びをしている中，CC男は1人で絵本を読んでいる。絵本を読み終えた様子のCC男は，絵本を本棚に片付けると，他児が遊んでいる様子をぼんやりと眺める。すると，保育室にCG男が入ってくる。CC男は，CG男が保育室に入ってきたことに気付くと，その姿を目で追う。CG男は，数人の男児が座ってブロックを使って遊んでいる輪に向かって「入れて」と言いながら近づく。すると①CC男は，微笑を浮かべて踊るように手をくねくねと動かしながらCG男に駆け寄り，CG男の側面から腰に飛びつくように抱きつく。その衝撃で2人は床に転がる。CG男は驚いたようであったが怒る様子はなく，笑顔で抱きつくCC男に対して笑いながら引き離そうとする。

下線部①の強い身体接触が発現する直前，絵本を読み終えたCC男は，他児の遊んでいる様子をぼんやりと眺めていた。この姿から，CC男が何をしようかと遊びを探している印象を受ける。その時，CG男が保育室に入ってきたことに気付いて目で追っていることから，CC男はCG男に対して関心を示している様子がうかがえる。「入れて」と言いながら男児らのもと

へ近づくCG男に対して，CC男は，遊ぼうなどと声をかけるのではなく，踊るように手をくねくねと動かしながら駆け寄り，飛びつくように抱きついている。この様子から，CC男が用いた強い身体接触は【ⅴ反応を期待して仕掛ける】意味をもってCG男に向けられたものと解釈できる。CG男が男児らに向けて「入れて」と発話していることから，CG男がこれから何をしようとしているのか，CC男にも理解できたと思われる。しかしCC男は「踊るように手をくねくねと動かして駆け寄り，飛びつくように抱きつく」という行為によって，CG男とのかかわりを生起させるため，ふざけてちょっかいをかけていると捉えられる。強い身体接触に遊戯性を伴わせることによって，CG男の興味を強引に自分へと向けようとしていると捉えられる。堀越[9]は，幼児におけるふざけ行動の意義を検討し，その中でふざけ行動の果たす機能として「関係強化pos.」「関係強化neg.」「緊張緩和」「仲間入り」「自己主張」を挙げ，ふざけ行動は相手と共に楽しむことを期待したものと述べる。ふざけ行動には受け手とのかかわりを展開しようとする行為者の意図が含まれており，幼児がふざけを用いて他者とかかわることで，遊びが展開・発展する可能性があることが示唆されている。本事例における強い身体接触においては，ふざけ行動という遊戯性を伴わせることによって，受け手とのやり取りを期待していると考えられる。

下線部①の強い身体接触は，分析シートから受け手の腰部分に対して勢いよく飛びついていることがわかり（【接触の強さ3】【興奮の強さ3】），CC男は意図して強く身体を用いることでCG男とかかわろうとした行為と読み取ることができる。そのため，この強い身体接触には，遊戯性に加えて意図性が伴われていたと捉えられる。

このように＜3歳児3期・4歳児全期・5歳児1期＞と＜5歳児2・3期＞には，高い遊戯性を伴う強い身体接触が多く発現している。また時期を経るとともに，強い身体接触に高い遊戯性と意図性が伴われるようになることが示された。

Ⅳ　総合考察

＜3歳児1・2期＞＜3歳児3期・4歳児全期・5歳児1期＞＜5歳児2・3期＞の3つの時期に区分して散布図を作成し,「攻撃性×遊戯性」「攻撃性×意図性」「意図性×遊戯性」の観点からみた強い身体接触について比較検討した結果，幼児が用いる強い身体接触に伴う3つの性質における発達的な傾向が示された（図3）。＜3歳児1・2期＞は攻撃性が高く遊戯性が低い強い身体接触が発現する割合が51.4％であり＜3歳児1・2期＞に発現した強い身体接触の約半数は【ⅰ言葉にならない・言葉では表現しきれない思いが溢れる】【ⅱ発した言葉を強調する】の2つの意味であった。この意味をもつ強い身体接触は，相手に対して感情的にかかわる行為である。そのため＜3歳児1・2期＞は，強い身体接触に，相手の行動に対して衝動的に遮断させたり変容させたりする「攻撃性」が高く伴われる傾向があり「表しきれない言葉の代替期」と捉えられる。

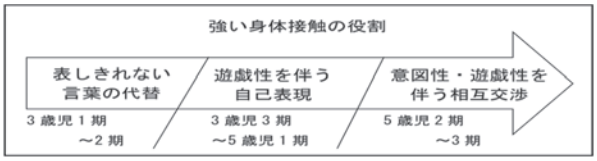

図３　強い身体接触の役割と発達的傾向

次に＜3歳児3期・4歳児全期・5歳児1期＞では，72.3％の強い身体接触に高い遊戯性が伴われていた。攻撃性が高く遊戯性が低い強い身体接触の発現頻度の比較においても，＜3歳児1・2期＞は51.4％，＜3歳児3期・4歳児全期・5歳児1期＞は17.6％と，発現頻度が減少していることが示された。また分析シートから強い身体接触の受け手となった幼児の反応を比較したところ,行為者の強い身体接触を「拒む」結果となったものは＜3歳児1・2期＞は35接触中17接触の48.6％，＜3歳児3期・4歳児全期・5歳児1期＞は148接触中21接触の14.2％，＜5歳児2・3期＞は69接触中24接触の34.8％であった。高い攻撃性を伴う傾向が示された＜3歳児1・2期＞では，強い身体接触を受け手が拒んだ事例が半数程度確認されたことに対し，＜3歳児3期・4歳児全期・5歳児1期＞では14.2％と頻度が減少していた。これは，強い身体接触にふざけやおどけ，笑顔などの表情を通して表現される「遊戯性」が伴うことにより，受け手に拒まれることなくかかわりが成立していると考えられた。平井・山田[10]は幼児のおどけ・ふざけについて「おどけたりふざけたりしている子どもの意識には，解放感があって，遊びをさらに発展させようとしている」「子どもは，遊びの中で時おり突飛な言動をすることにより，友だちと笑い合い，楽しみながら活動を転換させたり発展させたりしていく」と述べる。それは幼児が他者に対してかかわろうとして用いるおどけやふざけに遊戯性が伴われていることにより起こるものと考えられる。

そのため＜3歳児3期・4歳児全期・5歳児1期＞は，強い身体接触に高い遊戯性が伴われる傾向があり，自己を表現して他者とのかかわりを望むために強い身体接触が用いられることから「遊戯性を伴う自己表現期」と捉えられる。

＜5歳児2・3期＞では，強い身体接触に高い意図性が伴われていると捉えられた事例の発現頻度が，3つの時期の中で最も高い割合であった。また，強い身体接触に高い攻撃性と高い目的性が伴われた行為の発現頻度が，＜3歳児1・2期＞は0％，＜3歳児3期・4歳児全期・5歳児1期＞は5.4％，＜5歳児2・3期＞は

11.6％と，少数ではあるが時期を経るとともに用いられるようになることが示された。また高い意図性と高い遊戯性が伴われた強い身体接触の発現頻度は，＜3歳児1・2期＞は5.7％，＜3歳児3期・4歳児全期・5歳児1期＞は23.6％，＜5歳児2・3期＞は53.6％と，時期を経るごとに割合が高くなることが示された。＜3歳児1・2期＞では【ⅰ言葉にならない・言葉では表現しきれない思いが溢れる】意味として感情的に用いられる強い身体接触が多数発現していたことに対し，＜5歳児2・3期＞では【ⅳ 言葉では表現しきれない考えを補う】意味として意図的に相手にかかわろうとして行為に及ぶ事例が捉えられるようになることからも，＜5歳児2・3期＞は行為の先の見通しや期待をもって相手にかかわろうとする高い「意図性」が伴われる傾向があるといえる。内田・津金[11]は，幼児期の論理的思考力の発達において各年齢の特徴を示しており，その中で「5歳児クラスの2学期以降は，『可逆的操作』『メタ認知』『プラン能力』が連携協働するようになり，帰納推論や演繹推論によって妥当な結論を導き出そうとする」と述べている。本研究において5歳児の2・3学期に高い「意図性」が伴われることが示されたことは，内田･津金の主張からも支持される。

これらのことから＜5歳児2・3期＞には，「攻撃性」「遊戯性」「意図性」が複合的に伴われた強い身体接触が発現し，その行為によって他者とのやり取りが展開されるようになることから「意図性・遊戯性を伴う相互交渉期」と捉えられる。

以上から，強い身体接触には「攻撃性」「遊戯性」「攻撃性」の3つの性質が伴われており，3年間を9期ではなく，＜3歳児1・2期＞＜3歳児3期・4歳児全期・5歳児1期＞＜5歳児2・3期＞の3つの時期に区分することによって，幼児期3年間の時期的な変容を捉え，幼児期における発達的な傾向を知ることができた。

本研究では，COVID19が蔓延し休園措置が取られたことにより，4, 5月及び3月の観察を実施できなかった。新入，新学時期と年度末の時期に独特な傾向が見られる可能性があるため，この時期も含めた強い身体接触の発達的な傾向について検討する必要がある。

注

注1 幼児間の相互行為場面を強い身体接触として捉える観点とそれを描き出すための分析シートを作成した。幼児の行為が「強い身体接触」であると断定して解釈する際，恣意的な判断を避けるため，強い身体接触における「強い」と「行為者と受け手の双方に何らかの影響を及ぼしたかかわり」を同定するための観点と水準を設定し，各事例別に分析シート（表2）を用いて判断した。分析シートを用いて事例を記述することで，事例を細分化して捉えることが可能となり，また各シートを見比べることで，1つずつの強い身体接触を比較検討することが容易となり，発達的な変化を追うことも可能となった。本研究では，強い身体接触に3つの性質がどの程度伴われるかを判断する際，事例の解釈に分析シートの観点を加えて検討した。

表２　分析シートの観点と水準

身体接触に関する情報		内容（観点と水準）	記入例
【時間】		身体接触が発現した時間	8:45
【行為者→受け手】		身体接触の行為者とその受け手	BW 子→BG 男
【直前の事象】		身体接触が発現する直前の行為者と受け手の様子	BW 子が BG 男の頬を掴むと，BG 男が移動する
【行為の概要】		行為者が用いた身体接触の概要	抱きつく
【接触部位】		身体接触によって接触した行為者と受け手の身体部位 （行為者の身体部位→受け手の身体部位）	上半身→腰
行為者	【表情】	身体接触が発現した際の行為者の表情 （笑顔／微笑／真顔／不満・しかめ面／怒り）	笑顔
	【発声】	身体接触が発現した際に伴われた発声 （発声した言葉を表記／無）	「よっこいしょ」
	【受け手との向き】	身体接触が発現した際の行為者と受け手の向き （正面／側面／背面）	背面
	【接触の強さ】	身体接触の物理的な強さ （１／２／３　＊弱１→強３）	3
	【興奮の強さ】	身体接触が発現した際の興奮の強さ （１／２／３　＊弱１→強３）	3
受け手	【反応】	身体接触を受けた際の反応 （拒む／拒まない　＊概要を表記）	拒まない （這って移動を続ける）
	【表情】	身体接触を受けた際の表情	微笑
【かかわりの頻度】		行為者と受け手の日常的なかかわりの頻度 （１／２／３　＊少１→多３）	2

引用文献

1) 塚崎京子・無藤隆（2004）保育現場における3歳児の身体接触の変容．乳幼児教育学研究．13．13-25
2) 藤田清澄（2011）遊びの中で見られる幼児の身体接の意味－身体知の視点から－．保育学研究．49．29-39
3) 根ヶ山光一・山口創（2005）母子におけるくすぐり遊びとくすぐったさの発達．小児保健研究．64．3．451-460
4) 正木健雄･井上高光･野尻ヒデ（2004）脳を鍛える「じゃれつき遊び」．小学館．12-34
5) 千葉洋平（2013）じゃれつき遊びの効果と特徴に関する研究．国士舘大学体育研究所報告．32．113-117
6) 渡邉拓真・鈴木裕子（2022）幼児間で用いられる強い身体接触がもつ意味．愛知教育大学研究報告．教育科学編71．8-16
7) 同掲．8-16
8) 長濱成未・高井直美（2011）物の取り合い場面における幼児の自己調整機能の発達．発達心理学研究．22．3．251-260
9) 堀越紀香（2016）幼児における「ふざけ行動」の意義博士論文．白梅学園大学．29
10) 平井信義・山田まり子（1989）子どものユーモア：おどけ・ふざけの心理．創元社．104
11) 内田伸子・津金美智子（2014）乳幼児の論理的思考の発達に関する研究：自発的活動としての遊びを通して論理的思考力が育まれる．保育科学研究．5．131-139

（2023年9月21日受理）